

翻訳は三人四脚
『精霊の守り人』の作者と訳者、大いに語る
(要旨)

平成 22 年 4 月 24 日

講師：上橋菜穂子、平野キャシー

作品を海外に紹介したいと思ったきっかけ

上橋：海外では、日本人は日本で考えているほど知られていません。私は、子どものときにアーサー・ランサム『ツバメ号とアマゾン号』など、イギリスの児童文学を通じてほかの国のことを知りました。日本について知ってほしいなら、日本の自然な物語が海外へ渡って行って、子どもの時にそれを読んでもらうのが一番ではないかと思ったので、自分の作品を海外で紹介できたらいいなあと、ずっと思っていました。

児童文学が海を渡る難しさ

平野キャシー：アメリカでは、すでに充分、よい児童文学があるので、外国語、特に、実際に編集者などが読んで判断することが難しい日本語などの作品をわざわざ翻訳・出版する必要はない、と思われているのです。作品を出版して売れるかどうかを編集者が判断するには、英語版がないと分からないので、20～40 ページほどの梗概をだれかに作ってもらうのですが、それでも、日本語を英訳できる人が非常に少ないので、ヨーロッパの言語より、日本語の英訳版出版の機会がますます狭められてしまうんですね。

上橋：しかも、部分的なサンプルだけだと作品の全体的なよさが伝わらないでしょう？ とくに長編物語の場合は「言葉の壁」の最初の一步を越えるのが難しい。その壁を越える試みをするために、私は、偕成社の担当編集者に「私が自腹を切ってもよいので、まずはキャシーさんに全部を翻訳していただきたい」と提案したのです。

そのときは、その本がアメリカで出版される保証はなかったし、アメリカの出版社から本が出るとしても、翻訳者を決めるのはアメリカの出版社なのでキャシーさんになるとは限らなかった。だから、キャシーさんにとっても利の薄い仕事になる可能性があったのです。その二重のリスクを冒し、更に自腹を切っても、やってみたかったんですよ。そうしたら、なんと偕成社が、費用を負担して全訳を作りましょうと言ってくれました。

『精霊の守り人』がアニメにもなり、アメリカで翻訳をとという話が起きたとき、すでに全訳があったこと（アメリカの編集者が物語を全部読んで判断できる状態にあったこと）が、翻訳出版される大きな力となったんだと思います。

海外での評価に責任を感じます

平野：『精霊の守り人』のアメリカ版を出した出版社は、何年も前からこの本を評価していたけれど、実際に翻訳出版に踏み切るには、アメリカでも売れる、と思えるきっかけが必要だったと聞いています。アニメがアメリカに渡ると聞き、今が出版のチャンスだとその出版社が思ったのでしょうかね。

上橋：出版社にとって出版するかしないかの判断をするのは、ビジネスとして大切な行為ですからねえ。でも、作品を読めなければ、評価はできないわけで、その点、ぱっと絵を見て魅力が分かる絵本や、アニメ化されてその内容が評価できる状況になっていることが大切になるわけです。

1966年に創設されたバチェルダー賞（The Batchelder Award）¹を受賞した日本人の作品（丸木俊氏の『ひろしまのピカ』、湯本香樹実氏の『夏の庭：The friends』、宮部みゆき氏の『ブレイブ・ストーリー』、上橋菜穂子氏の『精霊の守り人』）のうち、『ブレイブ・ストーリー』や拙著『精霊の守り人』はアニメ化されているし、『魔女の宅急便』も、アニメになって世界中で見られる有名なコンテンツになっていますよね。

日本の本が出版されても、評価されなかったら次は海外の出版社が冒険してくれるかどうか分からないので、責任を感じます。

でもね、海外から翻訳されて日本に入ってくる本の数に比べて日本から発信する数が非常に少ない状況が、このままでよいはずがない。ところが、日本から外国に出ていく本が少ないため、児童文学の翻訳だけでは翻訳者が食べていけないという悪循環があるんですよ。

平野：日本の児童文学を愛しているから翻訳をすること自体は、とても「やりたいこと」なんです。でもね、児童文学の翻訳はとても時間を要するのにお金にならない。ほかのものを訳しながらやらざるをえない。お金になるのは、特許分野、医学の特殊な分野、コンピューター関係の特殊な分野、法律関係、ゲームなどですから、同じ翻訳でも児童文学とはテクニクが全く異なるので、そこが問題ですよ。

上橋：日本の児童文学が海外に出ていってしかも売れる、という好循環が出来ない限り、児童文学を翻訳する優れた翻訳家が育たない。でも、ここで止まっては仕方ない。どこかで冒険をしない限り、日本の長編児童文学はなかなか海外に出ていけないんですから。

L

¹ 1966年に全米図書館協会（ALA）が著名な司書ミルドレッド・L. バチェルダーの名前を冠して創設した賞。最も優れた外国の児童書の翻訳作品をアメリカ国内で出版した出版者に与えられる。

大好きだから翻訳したい

平野：なぜ翻訳しているのかというと、それはもう、その本が大好きで、海外の人に読んでほしいからです。一生懸命頑張っている翻訳者は日本にも海外にもいることを知ってほしい。そして、日本の本をもっと海外で紹介してほしいと思ったら、ぜひ英語版を買ってください。本の売れ行きが上がっても翻訳者に利益はありませんが、絶版になってだれも読んでくれなくなるのはとても悲しいので。

主人公の年齢について

上橋：『精霊の守り人』の最初のページに、主人公のバルサが 30 歳だと書いてあります。日本では、私の本の読者の年齢層は幅広いので、さして問題にならないのですが、翻訳に当たってキャシーさんから「アメリカの編集者は、主人公の年齢が 20 代以上になるとヤングアダルトでなくなるので困ると言ってきますよ」と言われてびっくり。アメリカで新しい児童文学が出る時は、強力な推薦者たちがあらかじめテスト版を読み、その人たちが推薦してくれることが大切なのだそうです。ところが、その人たちが最初に主人公の年齢で引っかけると続きを読まないのでストーリーの評価をしてくれないというわけなんです。

アメリカの編集者もバルサが 30 歳であることの魅力は充分分かってきていたので、年齢を言わずにごまかすか、後半で 30 歳だと明かすかにしてはどうかと提案してきました。そういうわけで、冒頭ではなく、後の方で 30 歳だと分かる形に変えたのです。

作者、訳者、編集者の三人四脚

上橋：私とキャシーさんとシェリルさんというアメリカの編集者の三人が、膨大な電子メールのやり取りをしました。なんと、キャシーさんは私のために、編集者の間の膨大なやり取りも全部翻訳してくださったんです。本一冊翻訳するくらいの分量を和訳してくださったのですよ！ 本日の講演会タイトルの「三人四脚」は、私とキャシーさんとシェリルさんのやり取りを指すのです。

平野：シェリルさんはイギリスの作品である「ハリー・ポッター」のアメリカ版を編集した人です。上橋さんもシェリルさんも非常に熱意を持っていたので、その間にいたらその気持ちに応えたくなくなっちゃって（笑）。

上橋：シェリルさんは、いい加減なところで妥協することはない人で、編集者として素晴らしいと思います。そして、一発瞬間湯沸かし器のように、ピーッと激怒したりする私と、シェリルさんとの間で一番苦労したのは、キャシーさんでありました（笑）。

通信手段の発達が大きな力に

平野：荻原規子さんの『空色勾玉』と湯本香樹実さんの『夏の庭』を翻訳したときは全部紙でやり取りをしましたが、今は電子メールがあるので、送ったらすぐに返ってくる。この違いは本当に大きいですよ。

上橋：キャシーさんは四国の高松、私は千葉に住んでいるんですが、アメリカと千葉と高松の距離を、ネットはあっという間につないでくれるわけです。そしてファイルにコメントを加えてすぐに送り返すことができる。そのお陰で、『闇の守り人』、『精霊の守り人』の2冊とも、非常に綿密な作業をすることができました。

思考の流れの違い

上橋：ここからは翻訳の際、二人が文化の違いを感じたところをお話しますね。例えば、日本語と英語で思考の流れが逆であるために、文章の順序がひっくり返っているところがあったりするんですよ。

(上橋氏と平野氏が、『精霊の守り人』の日本語版とアメリカ版の一部をそれぞれ朗読。) こんなに変わってしまってもいいのか、と思われるかもしれませんが、思考の流れとしてすごく不自然で気持ちが悪いのであれば、それは直した方がよい部分なのだと思うんです。

完全に書き直した箇所もあった

平野：私がすごいなあと思ったのは、上橋さんが、なんと、ある部分を完全に書き直してしまったことです！ 星読博士のシュガが登場して、正史を語る部分なのですが、日本語版では、シュガという登場人物のことが書かれた後、だれともつかないナレーターが割って入り、語り始めるような感じになっている。つまりは「地の文」での説明が入っているわけで、日本語では主語をあいまいにできるから、それでも不自然さはまったく感じない普通の書き方なのですが、英語は「だれが何をしているか」がとても大事なので、誰が正史を語っているのが、気になっちゃうんですね。それで、編集者から「この部分は不要ではないか」とか「別のところに持って行こう」とか「少しずつ分けて各章の冒頭に2段落ずつ入れてはどうか」という提案がありました。アメリカ人に楽しく読んでもらうためにお互いにどうしたらいいのかを話し合っているうちに、ある時点で上橋さんから「それじゃ、私が書き直しちゃいましょう」と申し出があり、なんと、この部分が滑らかに読めるようにご自身で完全に書き直された。是非、英語版を読んでください。

上橋：いや～、やり取りを重ねるうちに頭が混乱してきて、自分の中で物語の流れとしてきれいに流れなくなってしまったので、それならこのシーンを丸ごと書き換えてしまおうと

思っただけで（笑）。

訳しにくい言葉

平野：訳すとき困った言葉に、「気配」という言葉がありました。英語にはない単語ですから。最初に、一応プレゼンス（presence）と訳したが、シェリルさんに理解してもらえなかったので、かなり長い文章を書いて意味を説明し、最終的には、物から来る気配ではなくて、その物に対する、それを受ける人の認識・意識（awareness）で表現しました。

上橋：これは翻訳が文化の壁を越えねばならないことを見事に示している事例だと思いますねえ。もう一つ、バルサがラルンガ（精霊）の殺気を感じてぱっと飛び上がるシーンがありますが、「殺気」も最初はシェリルさんに理解してもらえなかった。「……何か見えたんですか？」と聞かれました。（会場爆笑）

平野：『闇の守り人』で、最初に暗い洞窟の中で熱い気が「バーン」とぶつかる部分も、何か「玉のようなもの」と訳したので、シェリルさんはこれを実際の物として受け取ってしまったことがありましたね。これは「気」だと私が説明をしたら、シェリルさんは中国起源の「気」という言葉を使おうと提案してきたのですが、上橋さんは、「気」という単語は使わない、使うとしたら「これは作家が使っていない言葉である」という注釈を入れてほしい、と言ったんです。

上橋：なぜかといいますとね、「気」という概念には、中国から朝鮮や日本に入ってきた特殊な文化背景がくっついているからなんです。私は異世界のものを書くときに、外来語は使いません。例えば、私は「テーブル」とは書かず、「食卓」や「小卓」としています。「テーブル」は英語起源の片仮名なので。そういうことだけは、きちんと気を配っていたいのです。

レス・イズ・モア

平野：もうひとつ、よくシェリルさんに指摘されたことに、「レス・イズ・モア（Less is more.）」というのがあります。「書きすぎると読者の想像を邪魔するので、描写を極力削れ」というわけです。

上橋：そうそう、スピード感を増すために削れと言われることもありましたね。たとえば、バルサが二ノ妃に招かれて、夕食をふるまわれたあとで入浴するシーン。あそこで、侍女が新しい衣を渡そうとしたら、バルサが、自分がいつも着ている衣の方がいいから、と断るのですけれど、「読者が知りたいのは、この後、バルサがどうなるかです」と、削除の要請がきたんです。でもね、このときのバルサの言葉は、彼女の性格というか、気質がいきいきと

表れる、大切な言葉なんですよ。それを説明したら最終的にシェリルさんも納得してくれました。

ヘッド・ジャンピング

上橋：シェリルさんからのご指摘で面白かった言葉の一つに、ヘッド・ジャンピング (head jumping) という言葉がありました。シェリルさんに何度も「ここはヘッド・ジャンピングだ。気持ちが悪いのでやめてほしい」と言われたものです。数人が同じ場所においてひとつの出来事を見ているようなとき、例えば、チャグムが激流に落ちたときに、バルサが心の中で「気絶してておくれよ」と思っている、その気持ちを書きいれると、英語では、今、自分が見ているものから、突然、別の人の頭の中に入り込んで、別の目を見たような感じで、乗り物酔いを起こしたような、何とも気持ちの悪い感じになるというのです。これもきっと、英語の場合はだれが行動の主体かということをもものすごく自然に書いているからだと思いますね。日本語の場合は行動の主体をいつも明確にしようと思わないで書くこともある。もちろん日本の作家の中にも視点を定めて書く人は多いわけですが、私の作品の場合、多数の視点に滑らかに移っていく書き方をすることがあるので、シェリルさんは、気持ちが悪かったらしいんですよ。

平野：そうそう！ 私は長く日本で暮らしているので、いつの間にか気にならなくなっちゃってたんですけど、シェリルさんに指摘されて、ああ、なるほど！ と思いましたよ。でも、上橋さんがそのように書いた理由を聞いて、最終的に残した部分も多いですね。

性別について

上橋：この作品の登場人物にトロガイという呪術師がいるのですが、かなり物語が進んだ後になって、チャグムという少年が「え！？。トロガイ師は女なのか」と驚くシーンがあります。つまり、それまで、トロガイが女性であることが、読者に分からないようにしなければならぬのです。日本語なら、簡単なことなのですが……。

平野：英語だと必ず he か she を使う。主語がはっきりしているので、he と she を使わずにどのように表現するか、考えるのがとても大変でした。

上橋：トロガイ師の「師」をマスター (master) と言えば簡単だと思うかもしれませんが、実は、master は大体、男性に使われる言葉なんですよ。女性なのになぜ男性の形容詞である master を使うのか、アメリカの読者たちに納得してもらえるように、地の文に手を入れました。「ヤクーは、たとえ女性でも、優れた呪術の技をもっている者はマスターと呼ぶのだ」と。(会場 笑い)

日本特有の表現を訳す難しさ

平野：たとえば、日本で贈り物をする際に「つまらないものですけど」と言うときの気持ちは「喜んでほしい」ということですよね。この「気持ち」は英語圏と一緒なのだけど、小説の文章の中で突然この表現が出てきたら、読者に伝わらない。「え？　なんで、つまらないものを、つまらないと分かっているの？」となる。(会場 笑)

上橋：でも、前後に詳細な説明を書いたら小説の流れではなくなってしまうんですよね。私の物語は異世界を描いているために、元々私は、日本の読者にもこの世界が自然に分かるよう、説明と分からないように説明を入れながら書いているので、そういう意味では、むしろ訳しやすいのかもしれないですね。

平野：そうなんですよ！　湯本香樹実さんの『夏の庭』とか、『ポプラの秋』を訳すとき、「塾」という言葉が英語にはなくて、自然と理解できるようにするのにすごいやり取りをしました。結局、「塾」はクラム・スクール (cram school) としました。それから、大福がおばあちゃんの好物と書いてあるのがよく分からなくて、お菓子屋さんで写真を撮って編集者に送って説明したこともありましたね。大福は“daifuku”と書いてその後に説明を加えました。

上橋：面白かったのは、「祭り」という言葉が出てきたときに、フェスティバル (festival) にすると日本語でいう「ハレの日」のイメージが伝わらないといわれたこと。なるほどなあと思いました。それから、『闇の守り人』に「ルイシャ」という青く光る石が出てくるんですが、人々の思いが染み込んでそれが石に変わるので、長老が、「わしらはルイシャ<青光石>を<思い石>とよんでいるんだ」と言うシーンがあります。この「思い」は、難題だったんですよ。フィーリング (feeling)、シンキング (thinking)、ハート (heart)、スピリッツ (spirits)、ソウル (soul) のどれなのか、と質問が来た。(会場 笑) 日本語の「思い」には、全部がなんとなく入ってしまうんですよ。最終的に「ハート・ストーン」 (heart stone) にしました。

上橋：日本語では男女の違いなどによって言い方がいろいろな口調に変わりますが、英語ではなかなかそのような感じができませんね。ただ、シェリルさんが「バルサだったら妃の前でも I am とは言わず、省略形で I'm とやってしまうのではないか」などとよく考えてくださった。

平野：チャグムの話し方を訳するのが一番難しかったですね。日本語では、王子だと分かっちゃうくらい高貴な話し方だけど、英語では、話し方がそこまで変わることはないのです。

「守り人」への評価

上橋：今回、三人で綿密にやり取りすることができたことが、きっと評価につながったのだと思います。アメリカのアマゾン USA のサイト (<http://www.amazon.com/>) では読者が「守り人」の評価をしてくれていますが、そのなかに「これが翻訳ものだとは信じられない」という評価があって、すごく嬉しかった。キャシーへの最高の賛辞ですよ。

上橋：アメリカでは児童文学の枠が日本よりきっちりしているようで、学校関係者がこの本を図書館に置くか、置かないか、とネットで評価していたりするのも面白かったですね。「この本には少し暴力描写がある。少しラブ・アフェアー (love affair) が入っている」などとあり、そんなふうチェック項目があるような書き方をしているのが、ある意味意外であり、興味深かったです。

平野：そうですね。そういうチェックはかなり意識的になされていますよね。バルサの「くそっ」と言う言葉を、できるだけ悪くない言葉を選んだつもりで「ダム」(damn) と訳したんですが、編集者からは、「ダム (damn) という言葉を入れると、アメリカでは学校で置けない可能性があるので、気をつけるように」と言われたりしました。でも、その言葉はかなり後に出てきたので、実は残っています。(会場 笑)

おわりに

上橋：難しいことはたくさんありましたが、三人の連携プレーでそれを見事に乗り越えて『精霊の守り人』はバachelダー賞をいただき、『闇の守り人』もバachelダー賞のオナー (優良作品) をいただきました。最高の功労者はキャシーさんだと私は思っています。私たち二人の掛け合い漫才を聞いていただきまして、どうもありがとうございました。

平野：ありがとうございました。(会場 拍手)